

市町村合併に埋もれない、住民主導による真の住民自治の先駆け 城下町・松代の町並み再発見

長野県 長野市松代地区



お問い合わせ先
NPO法人夢空間 松代のまちと心を育てる会
TEL 026-278-1277
http://www.geocities.jp/yumekuukanmatsuiro/

長野県長野市の松代地区（旧松代町）は、昭和四十一年に長野市と合併しました。「大都市の辺境」となったことで、住民の声は行政に届きにくくなり、地区のまちづくりが立ち遅れることが懸念されてきました。しかし、平成五年の上信越自動車道の開通を機に、住民たちは行政との協働を進め、一方で過度に行政に依存しない姿勢を貫きながら、地域の歴史資産を生かした観光都市に向けて歩み始めました。

今、松代では、地域住民自身がまちを見つめ直す取り組みと、観光客をもてなすための取り組みが、相互に影響を及ぼしつつ相乗効果を上げています。ここでは、合併後も地域のよさを失わず、住民主導のまちづくりを進める松代地区の事例を紹介します。



松代観光の出发点・松代城趾

周囲の発展から取り残され 長野市との合併を選ぶ

長野市は長野県北部に位置する人口約三十八万三千人の都市です。明治三十年の市制施行以来、四度の合併・編入を経て現在に至りました。市内には東京電力株式会社の小田切水力発電所（二万六千九百ワット）や中部電力株式会社の里島水力発電所（三千五百ワット）などがあり、広範な地域に電力を供給しています。

かつての松代藩真田十萬石の城下町・松代地区は、市の中心部から南へ十キロほど。江戸時代には周辺随一の都市でしたが、明治期に開通した信越本線のルートから外れた

ため発展から取り残され、昭和四十一年には長野市との合併を選択しました。

当初の合併効果への期待に反し、実際には松代地区の住民の声は行政に届きにくくなってしまいました。

その後、合併を拒み独立の道を選んだ小布施町のまちづくりが脚光を浴びたこととは対照的に、「松代はだめだ。遅れている」という見方が内に満ちていきました。



上信越道の開通を機に まちづくりが再び動き出す

「当時は『合併で一段落』という意識が強く、私たち自身もまちの将来像を描き切れていませんでした」と語るのは、NPO法人「夢空間松代のまちと心を育てる会」の事務局 長・香山篤美さんです。そんな停滞ムードを一掃したのが、平成五年の上信越自動車道の開通でした。松代地区内に長

野インターチェンジの設置も決まり、まちおこしの機運が急速に高まります。鉄道の誘致失敗から百年後にめぐってきた好機でした。

最初の取り組みは、平成二年に開始した観光人力車でした。松代商工会議所の青年部有志が出資して、人力車一台を購入し「有限会社松代藩」を立ち上げました。現在は車も二台に増え、毎年四月から十月まで営業しています。

平成六年には、松代商工会議所が県中小企業総合指導所の協力を得て、現在のまちづくりの基礎となった「三百万観光プロジェクト二十一（以

下、三百万プロジェクト）を取りまとめました。

現在の取り組みに通じる 三百万プロジェクトの提言

三百万プロジェクトは、「年間三百万人の観光客を呼び込もう」を合言葉に、広く住民の意見を取り入れた上でまとめられました。

提言1 街づくり

「住む人が暮らしやすく、観光客が歩いてみたくなるまち」を目指し、「城下町めぐり」「寺めぐり」などの散策コース作りを提言しました。

提言2 味づくり

「松代の味」作りを目指し、地元名産の長芋づくし料理や、新たな特産品の開発を提言し

たほか、観光客向けに「お休み処」を増やすことも盛り込みました。

提言3 景観づくり

町民全体の景観意識の向上を目指し、町並みウォッチングの実施を提言したほか、長期施策として商店街の町並み整備も盛り込みました。

提言4 人づくり

活力ある地域をつくるリリーダ育成を目指し、異業種交流や、「松代学セミナー」の開催、文化財の体験学習などの実施を提言しました。

提言5 イベント

歴史・文化遺産を活用したイベント開催を目指し、松代出身の女優・松井須磨子にちなんだミュージカルや、佐久間象山に関するイベントを提言しました。



NPO法人夢空間松代のまちと心を育てる会の事務局長を務める 香山篤美さん

歴史・文化遺産を活用したイベント開催を目指し、松代出身の女優・松井須磨子にちなんだミュージカルや、佐久間象山に関するイベントを提言しました。

提言の多くは後に具体的な活動として実現しました。また、町並

松代の味づくりを目指したが お休み処は手痛い失敗を招く

三百万プロジェクトの「味づくり」を受けて、お休み処の設置が進められました。商工会議所のメンバーや一般市民の出資で、資本金二百万円の「有限会社松代亭」を設立、銀行からの借入金と合わせ計約四千万円を投じましたが、開業後五年で撤退を余儀なくされました。香山さんは「当時は意欲だけが先走ってしまい、事業展開は場当たり的でした。その上、決め手となる『味』を打ち出せなかったのですから、お客さんが来なくてももしかたありません」と振り返ります。この失敗事例を教訓に、松代地区は過度にハードに依存する施策を捨て、ソフト重視のまちづくりへと大きくかじを切りました。

一方、大型観光バスの通行に備え、商店街の店舗が後退して道幅を広げ、自主的な住

民協定を結んで城下町の町並みを整備した木町通りの取り組みは、プロジェクトの成功事例の一つです。平成十年には「街並み景観賞」も創設され、景観意識が地域全体に広がりました。

長野オリンピックを契機に 主婦たちが主役に躍り出た

平成十年の長野オリンピックは、松代にも大きな転機をもたらしました。多くの観光客が訪れたことで、「もてなしの心」の大切さや、観光産業の可能性を実感することができたからです。その翌年、女性によるまちづくりグループ「ホイッサッサ松代」が誕生

します。主宰の熊木のり子さんは「当初、まちづくりにはあまり関心がなかったのですが、小布施町のまちづくりでピンバッジが売れているのを見て『あれなら私たちにもできる』と、友達を誘って活動を始めました」と振り返ります。グループ名は、松代出身の山上武夫が作詞した「お猿のかごや」からとりました。

そして、松井須磨子デザインしたピンバッジを約三十万円かけて製作したところ、最初の七百個は即売し、その後も二十種類以上を送り出すロングセラーになりました。熊木さんは「利益は少なくても、楽しみに待っているファンを思うと、やめるにやめら

松代地区 略年表

昭和41年	長野市と合併
平成5年	上信越自動車道開通・長野IC開設
平成6年	松代商工会議所が「300万観光プロジェクト2」を取りまとめ
平成10年	長野オリンピック開催
平成11年	「ホイッサッサ松代」発足
平成12年	長野市、中心市街地活性化基本計画を策定、松代が中心市街地に指定される
平成13年	行政との協働による「信州松代まるごと博物館」構想を策定 任意団体「夢空間松代のまちと心を育てる会」発足 「お庭拝見」ツアー開催
平成14年	NPO法人「夢空間松代のまちと心を育てる会」発足。
平成16年	「エコー・ド・まつしる2004」開催 「エコー・ド・まつしる倶楽部」発足
平成18年	住民自治協議会発足（予定）



「好奇心が私たちの強み」と語る熊木のり子さん

「思い立ったらすぐ行動」で地域の閉そく感を打ち破る

続いて、ホイサッサ松代は酒屋さんや漬物屋さんに声をかけ、オリジナルの長芋焼酎やしょうゆ豆を作り、「ホイサッサ」のブランドで売り出しました。最近では、ウリを使った鉄砲漬「ホイサッサ漬」を、「松代の味」として売り出すことも計画しています。「ほとんどが手作りです、製造



ホイサッサ松代が作ったオリジナル商品の数々

が大変なわりに利益はわずかですが、趣味と違って続けるつもりです」と熊木さん。現在、保健所の許可を取るための設備を準備中で「酒豆、漬物の三点セットを松代名物に育てたい」と意気込んでいます。

「失敗を恐れるより『まずやってみよう』という好奇心が私たちの強み。余計なしがらみがない分、女性の方が活動しやすいようです」と笑う熊木さんに、香山さんも「もっと早くに女性パワーを取り込んでいたら、まちづくりはとっくに成功していたでしょう。彼女たちが地域の閉そく感を打ち破り、男性陣の頑張る気持ちをも引き出してくれたのです」とうなずきます。

行政任せきりで終わらせず市民参加型のまちづくり

平成十二年、長野市の中心市街地活性化基本計画が策定されました。すでに合併から三十年以上が過ぎていますが、市は中心市街地の一つとして松代地域を取り上げまし

新たな観光需要に応えるため観光に「学び」を取り入れる

テーマ別に各二時間程度の散策コースが完成し、各種パンフレット類のほか、平成十六年刊行の「信州松代夢空間めぐり」という冊子にも掲載されました。



エコー・ド・まつしる倶楽部の運営委員会委員長を務める 八田慎蔵さん

異なる旅行需要に応えるため、「学び」の要素を取り入れて「遊學」(ようがく)「城下町信州・松代」のキャッチコピーを採用しました。市との協働が進められた実行委員会では、県内や首都圏に向けてポスターやパンフレットによるPRを行ったほか、文化財を活用したお茶やお花の会や、伝統芸能の上演など、多数のイベントも開催しました。その結果、年間三十万人だった松代の観光客は、この年、一気に八十六万人まで増加しました。

※エコー・ド・フランス語で学校、学派

平成十三年以降、市は必要に応じて特定地域への重点投資を行う政策を進め、松代城趾の整備が終わる平成十六年を「松代イヤー」と定めました。長野市を訪れる年間約七百万人の観光客の新たな受け皿として、城下町・松代が選ばれたのです。



美しい築地塀が続く武家屋敷の町並み

た。これを受けて、地元が中心となり、翌平成十三年に行政との協働による「信州松代まるごと博物館」構想(コラム参照)をまとめます。また同年、市に「まちづくり推進課」が設置され、行政の体制も整いました。

その一方で、香山さんや熊木さん、それに現在、エコー・ド・まつしる倶楽部の運営委員会委員長を務める八田慎蔵さんたちは、「行政任せきりではいけない。住民ができることをもつとやらなければ」という思いを強くします。そこで、同じ平成十三年、広く一般市民にも参加を呼びかけて、有志約百名による任意団体「夢空間松代のまちと心を育てる会(以下、夢空間)」を立ち上げました。香山さん

信州松代まるごと博物館構想

長野市の中心市街地活性化基本計画に基づく、松代地区の基本計画です。内容は①城下町らしさを演出する町並みの形成②歴史と文化を生かした観光商業の振興③来訪者を迎える「もてなしの心」の醸成④人にやさしい交通環境の整備などです。

「過性のイベントで終わらせず生涯学習交流リゾート」へ

エコー・ド・まつしる二〇〇四を一過性のイベントに終わらせず、行政が去った後も、基本理念である「生涯学習交流リゾート」を具現化するための取り組みが「エコー・ド・まつしる倶楽部」です。生涯学習や趣味のジャンルごとに約七十の「専科」を設け、計約千名の人たちが現在も活動を続けています。各専科では、自分たちで年間計画を立てて教室を開き、春夏と秋冬の年二回、パンフレットを発行しています。二年目に入った平成十七年度からは、観光客の側から「こんど松代に行くから、お茶の会ができませんか」といった問い合わせが増え、委員長の八田さんは「二方向の交流では不十分」という思いを強くしたそうです。そのため三年目の平成十八年度はこうした要望対応型の活動を増やす予定です。「観光客の要望には、できる限りのおもてなしで応えたいですから」。

自分たちのまちに誇りが持てる本場の意味での住民自治とは

合併で埋没することなく、独自のまちづくりを進めてきた松代地区。長野市は平成十八年度から既存の住民自治振興会を協議会に昇格させ、都市内分権による「多軸都市」の進展を図る予定です。八田さんは「協議会になると、観光だけでなく農業や商業、防災、環境など幅広い問題への対処が必要で、すべてに目配りができる確かなリーダーを出せるかどうか。地域の真価が問われている気がします」と語ります。

一方、熊木さんは「私たちは、健康で、友達がいて、少しお金があれば十分です。先駆者の誇りを胸に、頑張っている人を応援しつつ、ときには少々もの申しつつ、そういうかかわり方をしたいですね」と、主婦ならではの強みを生かした活動を目指します。香山さんは語ります。「本場の住民自治とは、誰でも参加でき、自由に意見が言えて、周囲の理解を得ながらまちをよくしていくことです。

は「今思えば、これが一般市民参加型の活動への転換点でした」と振り返ります。

登録文化財の申請活動

貴重な建物を守るため、登録文化財の申請活動にも力を入れています。専門の委員会を作り、専門家の助言を得て、所有者と交渉を重ねています。現在までに13件30建造物が認証を受けました。



夢空間は手始めに、市内に残る武家屋敷を訪ね、歴史資源を発掘する「お庭拝見」ツアーを開催します。このときは県内外から三百名を超す参加者が訪れ、外部の目でも松代を再評価してくれました。香山さんは「路地裏の石垣や土塀など、私たちに当たり前の光景も、まちの魅力の一つだと気づかされました」と語ります。



路地裏の何気ない光景にもまちの魅力が満ち



長屋門の前を水路が流れる「城下町・松代」の代表的な風景

そのためには、個人の横のつながりを重視したネットワーク型の組織が理想です。住民自治の成否は、新設される協議会がそういう形に近づけるかどうかにかかっているのではないのでしょうか。また今後は、観光主体のエコー・ド・まつしる倶楽部、住民自身の幸福を考える夢空間、と、それぞれの役割を明確にしておく必要もあるでしょう。「ここに住んでいてよかった」と誰もが感じ、次世代の人たちに手渡せるような、そんなまちづくりを続けたい。それには観光ももちろん大切ですが、「住んで楽しいまちづくり」が一番大事。これが私たちの結論なのです」。